

世界防災フォーラム 2025 UNU-EHS 主催セッションで講演しました (2025/3/9)

テーマ：災害レジリエンス、伝統知・地域知、自然環境との共生、山岳地、安全学

会場：仙台国際センター会議棟

URL：<https://unu.edu/ehs>
<https://gp-rss.tohoku.ac.jp/>

2025年3月9日、世界防災フォーラム2025において、国際セッション「Highland-lowland social ecological resilience through local knowledge systems」(S43)が開催され、原裕太助教(2030国際防災アジェンダ推進オフィス)が「Resilience and Vulnerability in Noto Peninsula: The Value and Crisis of the Living Heritage」のタイトルで登壇・講演しました。本セッションは、国連大学環境・人間の安全保障研究所(UNU Institute for Environment and Human Security)グローバル山岳安全研究プログラム(GLOMOS)(本部:ドイツ・ボン)が主催し、本学の災害科学・安全学国際共同大学院プログラム(GP-RSS)が共催しました。

原助教は、UNU-EHSのPaola Fontanella Pisa氏、本学工学研究科の佐野大輔教授に続いて登壇しました。

講演ではまず、能登半島の自然環境と地域資源利用や在来知の特徴、人間の営みを包含する環境保全と里山イニシアティブの考え方、生物多様性条約COP10(2010年・名古屋市)や第1回アジア生物文化多様性国際会議(2016年・七尾市)をはじめ、「能登の里山里海」が国際的に価値づけられ、注目されるに至った経緯を説明しました。

そのうえで、令和6年能登半島地震・豪雨災害の被害に焦点を当て、能登の自然と文化の特徴が今次災害に対してレジリエンスと脆弱性の二面性を有していたことを紹介しました。そして、昨年12月に開催した「石川×東北 研究者対話セミナー」での議論も踏まえ、農山漁村の復旧・復興は、最適解が異なる「生物文化多様性」と「より良い復興(Build Back Better)」の両面から考えられる必要があり、そのために学際的な議論の場が重要であること、どの伝統を守り変えるべきかを各地域で考える必要があることなどを提起しました。

その後、香港中文大学建築学院の王静瑩氏が登壇し、滋賀県・比良山麓における災害対応の伝統知・地域知について講演されました。本セッションでは、時間いっぱいまで活発な質疑応答が続きました。



登壇者の集合写真



原助教の講演

文責：原裕太助教(2030国際防災アジェンダ推進オフィス)